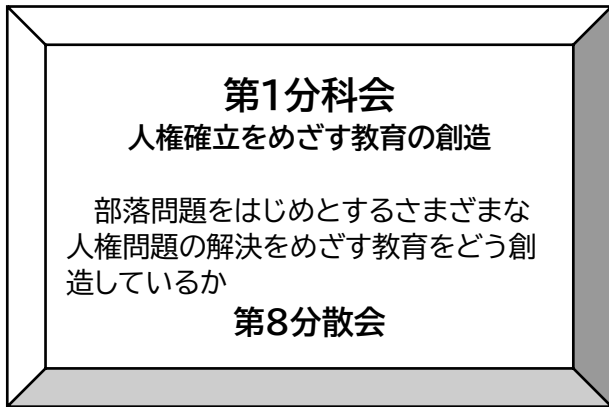




## I はじめに

分科会を始めるにあたり、実践協力者・報告者の自己紹介、諸注意等がなされた。

その後、報告資料集記載の内容をもとに、分科会の基調提案と討議の柱の確認がされた。「部落問題をはじめとするさまざまな人権問題の解決をめざす教育をどう創造しているか」という分科会のテーマに沿って、差別の現実を見つめ、さまざまな取組による子ども・保護者・教員・地域をはじめとする様々な立場の人の変容を報告レポートをもとに議論していくことが実践協力者により呼びかけられた。

日程説明の後、報告・討議に入った。

## II 報告及び質疑討論の概要

### ー報告1ー④

「おれ、人間だ！」

～子どもたちとつくる部落問題学習～  
(鹿児島県同教)

### ー主な質疑と意見ー

**佐賀** 水俣病と部落問題学習の共通点としては、土地差別につながり、マイナスイメージがついてしまった。部落問題についてはどちらかというと、職業差別から土地差別につながっていったというイメージがある。水俣病はイメージが悪いので、病名をかえてほしいという思いがあったが、結局広く周知されてしまった。部落問題学習という言い方は、全人教で広く言われるが、佐賀では、部落には何の問題もないので、部落差別問題学習というようにしている。この言葉についても、どのように考えているか。報告者の変容も含めて、話を聞きたい。

**報告者** ここで水俣病に触れたのは、部落問題学習を進めていく中で、自分の中にある差別心が水俣にある差別心と大きく関係があるからだ。今は、その差別心と闘いながら、授業を進めている。それは、今も自分の中にあり、自分が受けた学習が「水俣の人はかわいそう」というまちがった受け止めをしていたかもしれないということがある。そんな思いを子どもたちに持たせていけないという思いはある。今現在、その気持ちと重ねながらとりくみを

続けている。実際に、子どもたちが社会科見学で水俣病資料館に見学に行く中で、どのようにとらえているのかを痛感する場面があった。児童が水俣病が発生した場所の地図を見たときに、「自分の住む町でなくてよかった」と発言し、それを聞いていた児童が、「それはおかしいんじゃない」と発した。そのあと、その出来事を担任につないだ。それ以後、水俣病資料館を見学する前に、差別について学んでから、しっかりと思いをもって訪問するようにした。部落問題学習については、伊佐地区同教でも話題にあがるが、その言葉に対してどうにかしようという動きはないが、考えるべきだという声はあがっている。

**三重** 大口小学校には、むらがあるのか？

**報告者** はい。

**三重** 差別は昔のことではなく、今につながっている。部落問題学習を通して、今の学校で学んでいる子どもたちは、自分のこととして、考えることができています。しかし、前任校は、むらを有しておらず、なかなか自分事として、とらえることができていない。そういう学校こそ、どんどん学びを広げていくべきだと考えている。しかし、進めることができていない現状がある。どのように子どもたちに自分事としてとらえさせたのかを教えてください。

**報告書** 差別は昔のことではなく、今につながっているという表現は、部落があることを伝えているのではなく職業としてとらえさせることで、その職業の大切さを学ぶことで、今の自分たちにつながっているんだと考えさせている。

**三重** 部落史を学習することで、今の認識でどのように考えているのかを知りたい。

**報告者** 現在かかわっているむらでは、保護者も子どもも社会的立場を自覚しているかどうかはわからない。なので、被差別部落としての差別が今もなおあるということは伝えきれていない。部落差別が今もなお残っているということは伝えきれていない。

**鹿児島** 伊佐のとりくみが全国に報告される中で、なかなか部落についての学びの話が出てこない中で、ありがたい。報告者に問うたことがある。「何で児童生徒支援加配をしているんですか？」から始まっている。「同和」という言葉、「部落問題」という言葉のように差別を助長させているような言葉が未だに鹿児島県では多く使われている。今、先生たちの中で、部落問題をテーマとしたとりくみがなされているかと考えたときに、法切れのタイミングで同和問題は終わったと理解されていたり、部落差別解消推進法をほとんど知らない現状の中で、様々な人権課題を部落問題と結びつけているかというと、なかなかできていない。報告者もはじめは同じ理解度だった。しかし、2年め、3年めととりくみが進んでいくと、何が部落問題に重なっていつ

たのかを聞きたい。人間の中の憤りも含めて、教えてほしい。

**報告者** 部落問題学習にとりくむときには、吐き気が起こるきついきついものだった。しかし、今は自分の思いを吐き出せているのと、周りの支えがあったことでだいぶ楽になってきた。わたしの中で部落問題学習と水俣病がどのように重なったのか、差別されている人は何も悪くない。まわりの差別があるから苦しんでいる。すべての差別される問題に重なっていると思う。

**熊本** 水俣病については、生き様を重ねて自分の授業でも取り組んでいる。報告者の実践の中で、部落問題学習と水俣病の学習の報告者の認識を重ねているのか、を聞きたい。

**報告者** 部落問題学習の中で、具体的に水俣病のことを学習した記憶はないが、「思い込みやねたみが差別を生んで、相手を傷つけてしまう、私自身もそういうことがあって反省している」という話をした。5年生が水俣病を学んでいて、水俣病資料館に行く前に、なぜそこに差別があるのかを学んでから行くことにしている。自分自身の差別性も語っている。子どもたちに深く伝わるまではいいないが、話はしている。私自身がもっていた「差別のおかしさ」を伝えるようにしている。うまく伝えられないが、今後も考えていきたい。

**奈良** 今、部落差別があるということを子どもたちと考えること、伝えることはできていないのであれば、なぜ今、部落問題学習にとりくんでいるんだろうという疑問が湧いてきて、教科書に単元があるからしているのか、それをどうやってつなげていくのか？なぜ、部落差別があるということを伝えなかったのか、なぜとりくむのかを教えてください。

**報告者** もし部落がいまでもありますか、と聞かれたら答えないといけないと思っている。しかし、質問がないので、伝えていない。でも、伝えることで、考えが変わってしまうと感じた。また、なかまとどのようにもっていくかということを検討していきたい。学習会を行っているが、解放学習は行っていない。むらの人に聞く勇気がない、踏み込めていない部分と重なっている。まだ踏み込めていない自分の背中を押す言葉をいただきたい。なぜ部落問題学習に取り組むのかは、役割だから、加配だから、していた。しかし、とりくみが深まると自分の変容や子どもたちの変容は差別をなくす一歩だとおもっているの、様々な人権課題にとりくむことにもつながる。

**奈良** 他の担任はしないのか？

**報告者** 今は加配だけだが、先週担任にも授業をしてもらった。難しい」と言っていた。

**奈良** 個人の問題ではなく、所属として、地区として、考えていくこと、みんなですることが大事。部落問題にマイナスのイメージをもたないような、系

統的に素地をつくって、進めていくようにしてほしい。低学年からの指導が大事。

**兵庫** 今日は自分自身の差別心を抱えながらもまっすぐにとりくんでいく実践が参考になった。自分の学校では、中学2年生で自分の学校にむらがあることを知る。自分の中学校は、2つの小学校から入学してくるが、ひとつは対象地域がある学校、ひとつはない学校である。中学校2年生が出会うということを考えて授業の計画を進めている。先日、出会わせたときに、「だから、小学校から学んできたんだ」と前向きな気持ちになることができた。実践を進めるにあたって、中学校との連携はどうなっているのか、今後の学習を進めるにあたっての見通し等ははどうなっているのか、を聞きたい。

**協力者** 報告者の小学校の児童は、大口中央中学校に進学する。9つの小学校から、集まってくる。中学校の生徒支援加配に話してもらいます。

**鹿児島** 保護者に社会的立場を伝えていないのが、多くの鹿児島の実態である。中学校で、差別の実態について学ぶことができる。大口小の児童は、小学生のときに学んできたことを覚えていて、とりくんでいる小学校ととりくんでいない小学校があるのが現在の実態である。

**鹿児島** 鹿児島は同和教育の歴史は浅い。小中高で社会的立場を知っている子どもはほとんどいない。寝た子を起こすな、知らせてくれるな、黙っていればいつか消えていく、これが鹿児島県の現実です。その中で、先生たちが立ち向かっている現状は、一般論としての部落差別意識をなくしていくのかということを保護者と向き合っている。隣保館にくると、部落差別の実態にふれていきながら、大人も子どもも学んでいく。そして、それが連帯感につながっていく。支援加配の教師が、部落差別の現実を伝えていくことは、どの学校でもできていない。鹿児島には88か所の被差別部落があり、伊佐市に8か所ある。しっかりとつたえることができていないのは、わたしの部落だけ。そこで、伊佐の加配は、一緒に活動できている。対象地域がない学校が多数ある中で、ほとんど立ち入ることができていない。声をあげたくてもあげることができていない人たちもいる。

## －報告2－③

人権学習をする意味 （徳島県人教）

## －主な質疑と意見－

**奈良** アンケートをとってあるが、その中に「部落差別をなぜ知っているのか？」という設問はあったのか？毎年行っているのか？

**報告者** アンケートは昨年度から取り始めた。「部

落問題をなぜ知っているのか？」という設問もある。低学年の時から授業を行ってきたので、それで知ったとか、街の中に看板などがあるのでそれで知ったとか、あとは家の人からの話で知ったという回答があった。

**鹿児島** 差別される側を対象にする学びの場ではなく、差別する側の学びの場を設定したのか。差別する側は何を目的として学ばないといけないのか。報告者は、どういう意識を持っているのか。

**報告者** どういう対応かで加差別にも被差別の立場にもなるので、傍観者としての立場にも立たないように。被害者の場合は差別に立ち向かわなければならないので、どの立場にも合うように学習を考えている。

**鹿児島** 人が人を蔑視している、その人間性の根っこにあるものをつくっていく教育をしているのか？

**報告者** あらゆる人権課題について学習をしてきている。差別のない社会をつくっていく。幸せな社会をつくっていく。それが人間を尊重することだということを学んだ後に部落学習を行う。部落差別について学ぶ前に、そこまで高めてから学習をしている。

**大阪** 「差別と立ち向かうことはしない。一人じゃなかったらできるかも。かわいいけど。」と綴っている B さんにどのように関わったのか。子どもたちが学習以外の日常の中での変容があれば教えてほしい。

**報告者** B さんに対して「どうして？」と尋ねたり、継続して関わっていくというのは当然のことではあるが、実際には難しかった。それを担任が粘り強く関わり続け、その様子を周りの子どもたちも見ていた。そのことで B も学級全体も少しずつ変わってきた。何かきっかけがあって変わったというより、少しずつ変わってきたと担任からも聞いている。特定の子の何人かを変えていくというのではなく、周りの子みんなも変えていくということを意識して取り組んだ。もう一つの日常の中での変容ということだが、人権参観日を設定したり、人権教育通信を発行したりしている。家庭で人権について話題になることもある。子ども会に参加している子どもたちも多い。その中で、部落差別についての理解が進んでいないと思われる親の言動について、子どもが「それっておかしい。決めつけるのって良くないよ。」と親に意見したことがあった。また、おかしさや気づきを伝えに来ることが確実に増えてきたのが日常の中の変化だととらえている。

**三重** 子どもたちが学んだことを家庭でひっくり返されることもある。どのように家庭に周知していったのか？

**報告者** 直接、保護者と話す機会は少ないので、毎月、学校からの人権教育通信で人権学習の様子な

どを知らせる内容を配布している。人権参観日を設定し、人権について学ぶ授業を保護者に参観してもらい、一緒に考えてもらう。また、PTA の中に人権子育て推進部という部会があり、その会合で部落解放同盟の方の話を聞いたりしている。そういう中で、少数の中でも広がっていけばいいと考えている。

**兵庫** 他人事から自分事になるとか、部落差別が自分のこととして考えられるっていうのは、どういうことなのか。報告者自身としては、どういうことだと考えているのか。子どもたちが社会の中にある差別をなくす主体者になるような取組があったのか。

**報告者** 意識の問題、心の問題なので見えにくいなと思っているが、何もしない訳にはいかないし、何かしないといけないと思っている。自分事として考えるというのはどういうことかと、今も部落差別があるということについて考えないといけない。最初の意識調査の中で「勉強してもなくせなかったじゃないか」という他人事と感じている意見を戻していくために、今でも YouTube による差別とか裁判が続いているとか、今も差別があるんだという具体的なデータや資料を提示し、知ってもらうことでより自分事になるんじゃないか。校区として、連携して中学校でも継続していく人権学習なので、「今」じゃなくても、「いつか」自分事になるときがあるというふうに考えている。気づきから行動へという部分だが、実際に「こういうことをしてみよう」という授業はしていない。子ども会、交流会や行政が行っている子どもも参加できる研修会などに、参加してみるのも行動だし、いじめや差別を止めるなどイメージしやすい行動ではなくて、授業に真剣に取り組む、考えるという態度、姿も行動だと子どもたちに伝えていた。

**奈良** B さんの変容、友達を見る視点が変わっていくのがすばらしいと思った。大きなきっかけ、その変わりめは何だったのか。

**報告者** はっきりとした変わりめっていうより、徐々に徐々にというのが正直なところ。B さんは、すぐ考えてはいいても行動できないというのを保護者からも聞いて知っていたので、B さんの課題だと思っていた。周りの教員や担任が B さんに「できるよ」「B さんの力が必要とされている」と励ましの言葉をかけ続けたことによって、班分けで調整することができるようになったり、集会で発表したりすることができるようになった。そして、担任と子どもたち一人一人との対話も合わさって、この学級の中で自分の力を出しても違和感はないんだという気持ちに徐々にになり、最終的に C さんに対しても「良いところも知っている」という見方に変わっていったと考えている。

**三重** 母親に「おかしい」と言い返えすことができ

た子どもに価値付けの返しができたのか、また、そのことを学級全体で考えることができたのか。  
**報告者** そのことに関しては何も返しはできていない。

**熊本** 3点尋ねたいことがある。Bさんの記述の中に「差別に立ち向かうことはしない。なぜなら余計に差別されるから」というのがあるが、学級の中に差別があると思うが、この言葉に対して教師がどう迫ったのか。学級の中で Bさんを取り巻く差別がなくなったのか。その取組があれば教えてほしい。2つめは、山下一郎先生や識字学級の学級生の生き様やきつさと、先生や子どもたちの生き様、きつさと重なる部分があったのか。それがあつたら、自分事になるのではないかと考えている。3つめは、タイトルの「人権学習をする意味」、現段階でどんな意味があると答えが出たのか、教えてほしい。

**報告者** Bさんがそのような記述をした理由として、解放令の学習をして、解放令が出て、実際の差別がよりひどくなったことを学習したこともあって、差別をなくそうという行動をすると余計に差別がひどくなるということを過去の事例から考えているようだ。そして、「一人じゃなかったらできる」と記述したのは、周りを気にしているから。Bさんはいじめや差別を受けているというわけではないが、歴史の学習や6年生までの経験から、そのように考えたのではないかとと思う。2つめ、今、きつさを心の底から共感できるかということ、6年生には難しい。自分自身も共感できるし、理解もできるが自分が体験していないので、子どもたちが自分と重なるのは難しいと考えている。重ならないと自分事にならないので、今も部落差別がある、(差別の実態を)見ようとしなから見えなからということ伝えていこうと思っている。ただ、きつさ、差別を乗り越えるために行動や取組を継続していったという部分、その思いは子どもたちにもわかると思う。3つめの人権学習をする意味は、短くいうと「気づき」だと思っている。人権学習をしていきなり行動できるわけではないので、まずは気づき、知識から始まって、考えて、行動につながっていく。授業の時に、なぜ、このような学習をしているかと、子どもたちに気づかせたい。そのまま、行動につなげたいが、それは「今」「授業中」じゃなくても教師が見ていないところで発揮されるかもしれないので、人権学習をする意味は「気づきを与える」ことだと考えている。

**熊本** Bさんの話、周りの人の目を気にするということは、まさにそこに差別がある。生きにくさがある。周りにつながるための取組として、思いを綴って語り合うなどの取組があつたのかを聞いてみたかった。それから、気づきだけではいけないと思う。差別を見ぬく力を我々がつけていないと教室に差別があつても、社会に差別があつても、それに気づかない。

**徳島** 報告者の学校に40年前、勤めていた。その頃、保護者の中から、なぜ差別される側の人間が教室で人権学習した時に下を向かないといけないのか。下を向くような人権学習ってどうなのか。差別する側が学習しないといけないのではないのか。という意見があつた。そこで学習会をいろいろ行つたが、よそからもらった資料ばかりだった。そこで、自分たちの地域の人、山下一郎先生の生き方を学習するために教材を作った。また識字学級との交流もするようになった。人としてのすばらしさを子どもも親も学ぶようになった。そうした中で阿南市が一番に部落差別撤廃に関する条例を制定した。地域の声を聞いて気づき、周りの声を聞いて気づいて40年。その思いを今回報告してもらつたことがありがたく、また温かいと感じた。

### ー報告3ー⑦

「ともに育つ学級を目指して」

～Aとの出会いから～

(京都府人教)

### ー主な質疑と意見ー

**福岡** Aとの関りでどのようなことに苦労し、どう乗り越えたのか。これから Aを含む子どもたちとどのように向き合っていきたいと思っているか。Aの保護者とどのようにつながっていったのか。

**報告者** 担任をした当初は、Aと話ができなかった。なので、まずは Aとの関係づくりを重視して、できるだけ一緒に過ごす時間を長くした。トラブルが起こった時に意識していたことは、担任の言葉ではなく、Aの言葉で話をさせることを心がけた。初めは、とりあえずトラブルがなくなればいいやと思っていたが、今は、Aの良さを周りの子に知ってほしいと思うようになった。本校では、毎週学校の気になる児童の共有をしている。そこで得ることのできた Aの良さをまずは保護者に伝えるようにしている。

**鹿児島** Aと同じような子を担任しており、きちんとさせないといけないという気持ちはとてもよく分かる。Aはまわりの友だちに対してどのように思っているのか。また、「いわなあかん」という教材を使って授業をしたタイミングを教えてほしい。

**報告者** Aは習い事をとても頑張っており、そこに友だちや居場所があつて今の学校の友だちとのつながりにこだわっている様子はなかった。しかし、いくつかの選択肢がある中、地元の中学校進学を選んだ姿を見て、今の小学校の友だちとのつながりについて考えている様子が分かった。授業をしたタイミングは、報告者と Aがある程度関係を築けたタイミングで行った。

**鹿児島** 報告者の努力はとても良く分かった。今後、担任が変わったときに Aはどうなっていくのか。ま

た、学校体制として報告者以外の教職員は A とどのように関わっているのか教えてほしい。保護者の価値観を変えるのは難しいと思うがどのように保護者とつながっていったのか。

**報告者** 私が A とつながる中で気づくことのできたこと、学んだことはしっかりと中学校につないでいきたい。現在、学校では教科担任制をとっているため、たくさんの教員で A と関わり、情報共有を大切にして一緒に考えてもらっている。保護者の価値観を変えたいという思いで取り組んではいなかったが、A と関わる中で保護者の価値観を少しずつ変えていってもらうことにつながった。

**三重** 両親の言動の背景にあるものがとても気になる。両親のくらしの背景をつかんでいたら教えてほしい。

**熊本** A のしんどさについて。A は自分のしんどさを報告者やまわりの友だちに話すことはあったのか。

**報告者** A の保護者は、自分の努力や自分の力で今の生活を勝ち取ってきた人、成功してきた人。そのような1番になってきた成功体験が保護者自身にあり、自分の子に生き方を求めている感じがあった。A が両親から褒められることは少なかったが、両親が A のことを溺愛しているような様子はあった。A 自身のしんどさを口に出すことはなかった。

**福岡** 報告者と A との関わりやつながりを学級に返していくということをしていたのなら聞きたい。

**報告者** 学級通信や毎日書いている黒板のメッセージの中で、A を含む学級の児童の良いところを発信している。

**大阪** 「いわなあかん」という教材をつかったの人權学習をしたときに、学級の子どもたちはどれだけ教材と自分たちとのつながりを感じていたのか。また、A のことを扱う教材だと気づいていた子はいったのか。

**報告者** A 自身やまわりの子が、この教材は A のことを言っている、A のことだとしない工夫はして授業に臨んだ。A のことは必ず守らないといけないと考えていた。

**宮崎** 学年をまたいだトラブルがあったときに、教職員間で大切にしていたことは何か。どのように指導していたのか教えてほしい。

**報告者** 週に1回の学校での情報交換会を大切にしていた。学年をまたいだトラブルの時も基本は自分が間に入って、A と話すのは必ず自分にすることであることを心がけていた。

「みんなで太鼓をたたきたい」  
～子どもたちとつくる部落問題学習～  
(大阪府人連)

#### －主な質疑と意見－

**鹿児島** 大阪での取り組みの中で、子どもたちがどう変わっていくのか、あるいはその子どもたちが社会に出た時に、部落差別だけでなくあらゆる差別をなくしていこうという主軸、柱にどうやってなっていくのかについてお聞かせください。

**報告者** 当事者だけが強く生きていかなければならないのか、ともにどう一緒に生きていくのかということ子どもたちが考え続けているという状況で、変容した姿がはっきりあるかと言ったらないです。ただ、差別をしないで授業が終わるとか、学校生活が終わっていくのではなく、考え続けながらその考えを友達と共有するなど、自分の言葉を出して人と話し合っていく、伝え合っていくという。

**鹿児島** 今の大阪でこういう取り組みができるというのは、教師集団という受け皿があるということですよ。鹿児島あたりでこういう取り組みができないというのは受け皿がないからですよ。要するに差別される側の問題じゃなくて、差別する側の大量の問題でしょう。この点を踏まえて議論していただければ非常にありがたい。

**鹿児島** 全国の部落解放運動をしている青年と高校生が集まる全生全校っていうのがあるのだが、その中で高校生が被差別部落の話をしていく中で、どうしても最終の着地点が、どんよりとした雰囲気になってしまっているのが現状です。そこで、人權学習をして、プラス的な、明るい雰囲気で授業を終えられるような取り組みをしてもらいたいと思っている。Aさんに対する今後の展望についてと、BさんCさんが思いを語ったということだが、どのようなことを語ったのか、さらにBさんCさんとクラス担任をどのようにつなげようとしたのかについて教えてほしい。

**報告者** A だけではなくて、差別される側、差別されない側とかではなくて、全員が A だけではなく、自分自身の差別性に向き合っていくことこそが、部落差別問題だけでなく、他の人權課題について解消していけるのではないかなと。私も大人で子どもたちと向き合うけれども、一人の人間として一緒に考えていきたいなど。A は、卒業して行くが、今後もうつながり続けていきたいというふうには思っている。B と C がどのような思いを語ったということについては、自分が被差別部落に育ってきて、親御さんがどんな思いでいるのかっていうことをあんまり深く考えてこなかったところもあるということ、その思いをうちの人から聞いて、自分の家は…、という話を少しできたということ。B、C と担

任の先生をどうつなげたかだが、A、B、Cを同じクラスにするというのは、学年の中で本当のつながりをちゃんと作っていくというところでの狙いを設定していた。子ども会の活動の最後に、自分自身の家のこと、今置かれている自分のしんどさみたいなところを、担任の先生も含めて少し一緒に話し合ったという感じである。

**鹿児島** 弱さ弱さって子どもに言わせようとしているけど、まず私たちが、子どもにどれだけ自分のことを語っているかっていうのは大事だと思う。松原第三中学校の先生たちは子どもたちにどんな語りをしておられるのかについてお聞きしたい。

**報告者** 私も正直Aと向き合う中で、型にはめようとしていたり、何かこうあるべきだという価値観を子どもに押し付けてしまったりしていて、子どもらの主体性を奪っているなって思ったんです。Aも初めはしゃべってくれなかったんです。しゃべってくれるようになったきっかけは、卒業式の歌を決める際に曲を流した瞬間、子どもらに対する思いが出てきてしまって、教室でわんわん泣いてしまった時です。言葉にはできてないんですけど、子どもらが「いやいや、まだまだ早いやろ」と、ティッシュを持ってきてくれた時に、ああ私がやっぱり本音で子どもとつながろうとしてないと思い、もうその時にしょうもないプライドを捨てようと思ったんです。Aにごめん、ちゃんと先生本音で話ができてなかったと伝えた次の日、Aが電話をかけてきてくれました。その時に、やっぱり教師が教師らしくないといけなとか、世の中の物差しとかじゃなくて、子供から学ぶっていうことの大切さをAから教えてもらったんです。その時感じた気持ちを語り、素直な気持ちを伝えている。そして、子どもが返してくれた言葉を、またクラスの子に返すっていうことしかできてないです。

**福岡** 1つ目の質問ですが、食肉センターに届いた差別的な手紙を授業で取り上げたということですが、どんなものかについてお聞かせください。2つ目の質問です。松原第三中学校の先生方がしっかり結束されている理由は、やはり子どもたちと先生が弱さを出し合うように、先生たち同士もその弱さを出し合って結束しているのでは、と思いましたので、そのことについて伺いたいです。

**報告者** 食肉産業っていうのは、海外と異なり、なぜ日本では差別されるっていうのかっていう海外のニュースを子どもたちと一緒に学びました。

**大阪** 教師がどう連携するかっていうのは、入れ替わりも多く、継承が難しくなっています。どうやってそのことを継承していくかっていう時に、地域の方と連携していくことが一番大事で、地域の方から学ぶっていうこと、それは欠かさずやっていきたい部分です。他に、学校の根幹として大切にしているのは支援教育の取り組みです。自分に矢印を向け

て自分の弱さ、差別性に向き合っていく。子どもと一緒に考えていくっていうことを大切にしている。

### Ⅲ 総括討論 (1日目)

**視点①: 部落問題学習・人権学習をなぜ学ぶのか。**  
**視点②: 差別の問題を他人事ではなく、自分事としてとらえるにはどうすればよいか。**

**佐賀** 今の子どもたちにとって生まれたときから当たり前にある基本的人権というものをこれから大切にしていくなために差別の「おかしさ」に気づくことの大切さとそのための人権教育を続けていくことがとても重要だと思う。目に見えないものだからこそ、大切にし続けながら次の担い手につないでいきたい。小学生の段階では、まず差別に「気づく」ことができるかということにこだわりたい。

**徳島** 差別に気づき、それを伝えるということが差別をなくすための第一歩だと思う。

**熊本** 差別は私たちのまわりにたくさんある。その差別に気づくだけでなく、差別を見抜き行動を起こすことができるのかということがとても大切。部落問題学習を授業でするのは難しいという意見がとても多いが、どうして難しいと感じるのだろうか。そこを議論していく必要がある。部落問題学習をする中で、自分の生き様や苦しさを語る場面が重要だと考えている。

今、水俣病が環境問題にすりかえられてしまっているような気がする。

**鹿児島** 部落問題学習について、プラスイメージを伝えるだけ、マイナスイメージを伝えるだけの授業になってはいけない。その問題の裏に様々な人のどのような思いがあるのかを語っていくことを大切にしていきたい。

この全同教の場では、実践の成功例だけでなく、うまくいかなかったこと、悩んでいることもみんなで語り合える場にしたい。

**鹿児島** 差別に苦しむ人がたくさんいる現代において、どうしたら幸せにみんなが生きていくことができるのかということを考えるために学んでいると思う。差別と今の自分をつなげることに意味がある。差別をなくしていく仲間として、子どもも大人もつながることができるかということにこだわってきたい。

**鹿児島** 部落問題学習をする意味というものを改めて考えた。差別する側の問題だという考え方を大切に、まずは正しく知ること、そして差別があったときに「それはおかしい」と気づくことのできる力を育てていきたい。部落で生きてきた



人々の生き方から学んでいきたい。

**徳島** 法切れを迎えて、「人権教育」に移行していく中で、様々な人権課題を取り扱うようになり、同和問題に対する意識が薄れていっているような気がする。学校現場が大きく変わり、若返っていく中で、昔から大切にしてきたことをこれからの世代にどのようにして伝えていくかということが課題だと思う。

**熊本** 部落問題学習に取り組むときに大切にしていることは、自分ごとにする、そのために自分を語ること。部落差別と自分の何を重ねて語ったらよいのか悩むことがあったが、経験を積み重ねていく中で少しずつ分かってきた。授業の中で、子どもたち同士をつないでいくことを大切にしている。人間関係をプラスに変えていきたい。

**徳島** 若い先生が、大変な思いをしながら、苦しみながら人権教育、部落問題学習に取り組んでいるというのがよく分かった。現在、部落問題について学ぶ機会が減ってきているということに対して危機感をもっている。学べる先生をまずは作っていききたいと思う。

## (2日目)

**視点①:差別される側ではなく、差別する側に注目した同和教育・部落問題学習の実践について。**

**視点②:同和教育の継承について**

**奈良** 子どもたちの本音の言葉は私たちの心に響くものがある。差別される人が強く生きる必要はないという考えには納得いくが、強く生きる必要はないとは言いきれず、難しい問題だと感じた。部落問題学習を通して、正しく知り、差別をしない子どもたちを育てていきたい。自分自身、子どもの頃に部落問題学習を経験して、強くなれたと感じることがあった。

**大阪** 学校による同和教育・人権教育への温度差はやっぱりあると感じることがある。一人ひとりの「差別」という言葉に対する理解や認識は違うということを考えておかなければならない。差別をする側・される側という考えではなく、全員が反差別の生き方をできるようなことを大切にしていかなければならない。

**大阪** 子どもたちと一緒に部落問題学習をつくっていくという姿勢が大切。教師も自分自身が当事者であるという認識が大切。

**熊本** ただ仲良くなるだけでは差別はなくならない。厳しい状況の子どもの背景やしんどさをしっかり

りと理解し、自分事として向き合っていくことが何よりも大切である。その生きにくい状況の子をまわりの子どもたちとどうつなげていけるのかを考えていきたい。差別する側も生きづらさを感じているはず。差別をなくすための仲間づくりをいかにしていけるかが必要だと思う。「差別」とは、人と人がつながりできていない状態を表すと考えている。子どもたちの中に、いじめはないかもしれないが、差別はたくさんあるのではないかな。

**熊本** どうして差別をなくしていけばよいのかというヒントをたくさんいただいた。報告資料集 P260 からの森山英治さんの報告・実践をぜひみなさんにも読んでいただきたい。

**福岡** 自分の弱さと向き合い、その弱さを学級や職員室で出すことのできる温かい集団があるということが心の支えになると感じた。

**奈良** 自分自身の弱さや差別性をこの全同教の場では話することができて考えることのできる良い時間となった。つながるということはとても難しいが、つなげる努力はあきらめずにずっとしていきたい。その努力の先には、差別を自分ごととしてとらえ、差別の解消につながっていくのではないかな。

**鹿児島** 差別する側の教育について考えるきっかけとなった。子どもたちは様々な出会いの中で学習をし、たくさんのことを考えているということを日々感じている。

**鹿児島** 自分自身が子どもの時に関わってくれた先生の存在はずっと忘れられない。一人の子どもに深く関わっていくことは、不安に思ったり、難しかったりするかもしれないが、大切に導いてほしい。

**鹿児島** 今一生懸命子どもたちと関わっていることには必ず意味がある。

**鹿児島** 2日間を通して、とても自分自身が恥ずかしいと思うことが多かった。分からないこと知らないことがこれだけ多かったのだと認識した。これからたくさんを学んで子どもたちと関わっていききたい。

**大阪** 「強さ」とは何か。強さと自立はつながっているのではないかな。自分の弱さを出せることが本当の強さではないかな。その弱さを出すことのできる環境を作っていくことが大切だと思う。言葉になる声に気づき、寄り添っていききたい。

## Ⅳ 2日間の総括(まとめ)

最後に4人の報告者から一言をいただいてから

まとめに入った。

**協力者** この2日間の分科会を通して様々な学びがあった。地域の差は、取組の差ではない。鹿児島でも苦しみながら、熱い気持ちをもって取組を実践している人や学校がたくさんある。他の地域でもきっと一緒だと思う。私たちが差別に対して、どれだけ向き合っているか、どれだけ語っているかということにこれからもこだわっていきたい。差別の問題を自分自身と重ねて、自分のこととして考えることができるか今一度問い直していく必要がある。ここに集まった、同じ同和教育・人権教育を推進していく仲間との出会いを大切に、これからも差別の実態から学び、差別をなくすためにできることを実践していこうということを確認することができた。